

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 遍路道（屋島登山道）を歩く

講師 山元 敏裕

（高松市文化財専門員）

平成24年12月16日（日）

共催 高松市歴史民俗協会

高松市教育委員会

はじめに

四国遍路は、全長千四百kmにわたる弘法大師ゆかりとされる霊場寺院（札所）八十箇所を巡拝する習俗で、今日も根強く続けられています。では、いつ頃から始まったのでしょうか。その始まりについては史料がほとんど無く確かなことはわかっていません。熊野信仰・一宮信仰・山岳信仰・海の信仰等、多様な要素を指摘されていますが、それほど四国遍路の成立の背景は複雑であるといえます。四国遍路の原形ともいえる四国の山野を巡り歩く信仰の行を証拠立てるものとして、平安時代末に書かれた『今昔物語』『梁塵秘抄（りょうじんひしょう）』の内容中にその始まりを見出すことができます。

1 おおみややはちまんじんじや 大宮八幡神社

西暦八五九年（貞観元年）豊前の宇佐神宮より御船にて京都石清水八幡宮に御遷宮のおり、屋島沖の海上で激しい風波に遭遇し檀ノ浦の入り江に避難され御輿を陸地に遷御して奉り、三日間御鎮座される間に、風波も穏やかになり御船を出御の際、御鎮座の跡に神幣三振りを残されたのを里人等が氏神として奉祀することになりその場所

に一間半四面の板葺きの社を建立して三振りの神幣を奉ることになったが、人家も少なく、氏子も乏しく、奉祀するのが困難となり現在の場所に新宮を築き遷し奉られ鎮座されたのが西暦一一六〇年頃と伝えられ、この地名を新馬場と称され、又、旧跡地は現在「宮の窪」と伝えられています。（大宮八幡神社御由緒より）

2 大宮神社経塚

おおみやじんじやきょうづか

大宮神社経塚は神社の境内から出土し、神社に保管されていたものです。経塚からは銅製経筒、

経巻、青白磁合子が確認されています。この銅製経筒は火炎宝珠鈕をもち、八花形の傘蓋をかぶせ、傘のでっぱり部の中央に猪の目が透かして入れられるなど、滝の宮経塚（徳島県美馬市）出土の経筒に共通性が認められます。また、県下において経巻が出土した例として新宮安楽寺跡経塚（坂出市府中町）から四卷分、富田経塚から三卷



大宮八幡宮

分見つかっているだけで非常に貴重なものです。形態等から平安時代末から鎌倉時代初めのものであると考えられます。

経塚は、釈迦の入滅後、正法・象法・末法と世が移り、ついには仏教が衰滅してしまふという末法思想が広まった十一世紀の後半（平安時代後期）から經典を経筒に入れ、埋納する風習が盛んになりはじめたことによつて造られるようになりました。末

法の世を経て

五十六億七千

万年後に弥勒

如来が再びこ

の世の救世主

として現れる

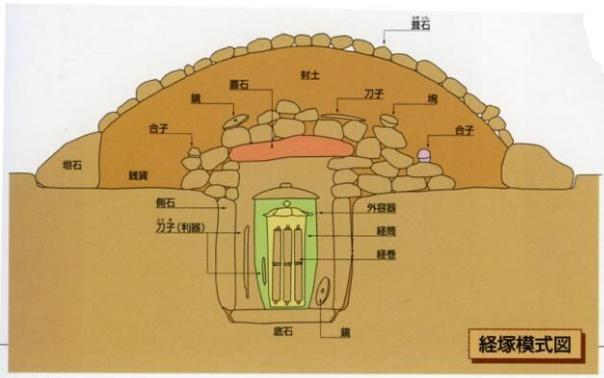
時までの經典

の保存を本来

の目的として

いました。その

ため、寺院や神



経塚模式図



大宮神社経塚 経筒・外容器

大宮神社経塚 経筒・外容器

社の境内地などで発見される場合が多いのです。

3 加持水 かじすい

弘法大師が、仏天を供養し誦呪加寺（呪文を
読み仏の加護保持を祈とうすること）をしたと
いわれる水です。

干ばつで各地の池や井戸水が枯れても、この
湧水は絶えることがありません。また、路傍の
石碑に字が刻まれています。弘法大師の筆跡
だと伝えられています。（加持水説明版より）

4 不喰梨 くわすのなし

空海（弘法大師）が屋島に登ったとき、梨が
おいしそうに熟していたので一つ所望をなさい
ました。でも、持ち主は「うまそうにみえてもこれは食べられない不喰梨です」と、



加持水

嘘を言っただけのことになりました。その後、この梨はほんとうに石のように固くたべられなくなってしまったと伝えられています。（不喰梨説明版より）

5 畳石 たたみいし

讃岐岩質安山岩の板状節理の露頭で、屋島寺へ至る遍路道沿いに見られます。板状の岩が層になっており、畳を重ねたようになっていきます。

西行法師の作と伝わる歌碑「宿りしてここに仮寝の畳石 月はこよひの主なりけり」があります。



不喰梨

6 屋島村道路元標

やしまむらどうろげんびょう

屋島寺への遍路道を登り切った左側にあります。道路法（大正8年）制定後の道路法施行令（同年11月）に道路元標の設置、各市町村に1個置くことを規定し、それに基づく内務省令により、石材そのほか耐久材の材料等を定めています。

7 屋島寺

やしましじ

四国霊場八十四番札所。山号は南面山。真言宗

御室派。本尊は千手千眼観自在菩薩。寺伝では天平勝宝六（七五四）年、唐の僧鑑真が屋島の沖で山の形を心眼に映し、霊場であると悟り、平城京に到達した後、法弟空鉢慧雲律師を屋島に送り、北嶺に堂宇を建てたのが、屋島寺の始まりであると言われ、その後、空海が北嶺から南嶺の現在の地に移したとされています。本堂は元和四年（一六一八）に住持竜巖上人によって再建された桃山様式の建築であると言われています。



屋島村道路元標

たが、昭和三十二年の解体修理により、各所に鎌倉時代の特徴ある古材、様式手法が発見され、元和四年の工事は大修理であり、鎌倉時代末頃の建立であることが判明しました。本尊である千手観音菩薩。梵鐘。本堂が国の重要文化財に指定されています。

屋島寺境内には、白色の酸性凝灰岩がみられます。この凝灰岩の表面を雪に見立てて造形して作庭し、雪の庭と呼んでいます。屋島寺宝物館（有料）から見学することができます。

屋島寺の北嶺から南嶺への移転については、近年の北嶺における発掘調査において、寺跡と考えられる遺構が確認されたことから、寺伝を裏付けることとなりました。



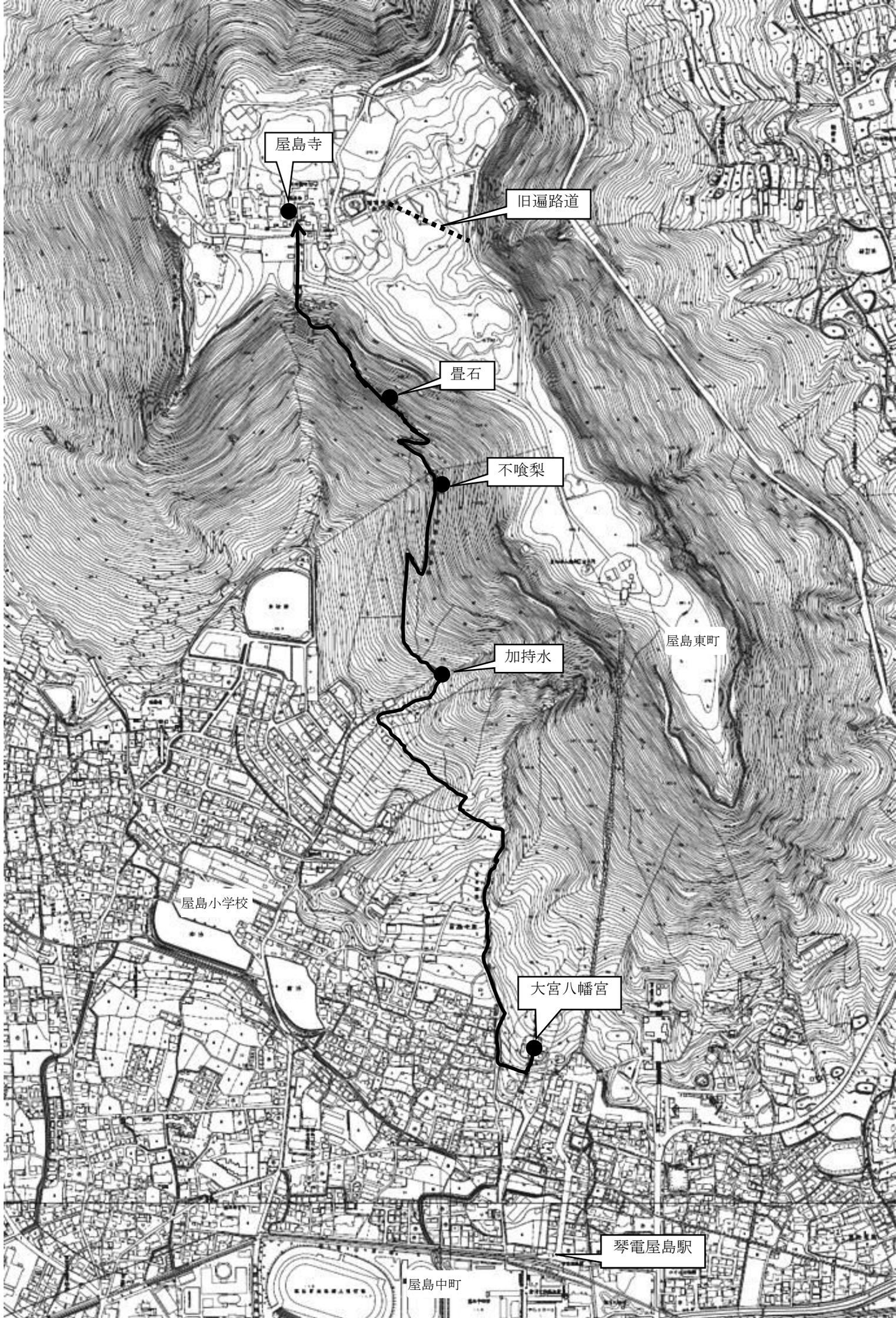
屋島寺

《参考文献》

『屋島風土記』屋島風土記編纂委員会 二〇一〇

『史跡天然記念物屋島・史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書』

高松市教育委員会 二〇〇三



屋島寺

旧遍路道

畳石

不喰梨

加持水

屋島東町

屋島小学校

大宮八幡宮

琴電屋島駅

屋島中町

12月16日(日) 屋島からの復路

◆屋島山上シャトルバス

| (屋島山上) | | (琴電屋島駅) | | (JR屋島駅) |
|---------|---|---------|---|---------|
| 12:05 発 | → | 12:13 着 | → | 12:22 着 |
| 12:45 発 | → | 12:53 着 | → | 13:02 着 |
| 13:05 発 | → | 13:13 着 | → | 13:22 着 |

◆ことでん電車【志度線・上り】

| (琴電屋島駅) | | (瓦町駅) |
|---------|---|---------|
| 12:21 発 | → | 12:35 着 |
| 12:41 発 | → | 12:55 着 |
| 13:01 発 | → | 13:15 着 |

◆JR屋島駅【高徳線・上り】

| (JR屋島駅) | | (高松駅) |
|---------|---|---------|
| 12:27 発 | → | 12:42 着 |
| 13:05 発 | → | 13:25 着 |
| 13:39 発 | → | 13:55 着 |



次回のふるさと探訪は・・・

テ　マ　一宮の文化財を巡る

と　　き　平成25年1月27日（日）

9：30～12：00



集合場所　田村神社駐車場（神社北側大鳥居側）

講　　師　廣瀬　和孝さん（市文化財保護協会顧問）

☆広報「たかまつ」1月15日号に開催案内を掲載しますので、ご覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、文化財課（TEL 839-2660「午前7時30分～開始時間まで」）でお知らせします。（電話が通じない場合は、「実施」です。）

★集合場所への交通案内★-----

◆ことでん電車【琴平線・下り】

| | | |
|--------|---|--------|
| （瓦町駅） | | （一宮駅） |
| 8：35 発 | → | 8：53 着 |
| 8：50 発 | → | 9：07 着 |
| 9：05 発 | → | 9：23 着 |

◆ことでんバス【日生ニュータウン行き】

| | | |
|--------|---|---------|
| （瓦町駅） | | （一宮バス停） |
| 8：28 発 | → | 8：47 着 |

「ふるさと探訪」に
参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょ
う。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路
の端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気をつけましょ
う。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょ
う。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気
をつけましょ
う。
- 5 文化財や自然を大切にしましょ
う。